

# 筑波山の神水と徳之島の浜泉を飲み干す人

酒木裕次郎第二詩集『筑波山』に寄せて

1

酒木裕次郎さんは、鹿児島県の徳之島で一九四一年に誕生し十三歳まで暮らした。その後は叔母のいる神戸で中学高校時代を過ごし、十八歳で東京に出て國學院大學文学部に入り、卒論は萩原朔太郎論を書いたという。卒業後は印刷会社に入り、二十代は出版部門で編集や営業をし、著名な作家たちの本も手掛けたらしい。その後は四十代からは先輩と建物の総合管理などの会社を興して現在もその仕事をされている。第一詩集『あけみ抄』は、学生時代に書いた詩篇を一九六八年の二十七歳前後にまとめたものだ。明美という女性との出会いと別れを記した抒情詩篇だ。その詩篇の中に「雲」という詩がある。

雲

雲 儼白な雲よ  
平安に満ち溢れ  
廣大な青空のうちに

無頓着に何処へともなく  
遊び廻はるお前の姿

胸を痛めて、病む胸を抱へて

僕は

遠くお前に憧憬れる

此の胸は張り裂けさうに呻ひて居る

雲よ

何処へお前は行くのか

薩摩に住まう僕を

何処か

だれも識らない人達のうちへつれて行き其処で仲間を作ら

せてくれ

此処はあまりに静かすぎる

雲よ

お前は東方へ行くのか

僕にも光は東方から来る

なつかしい人の居ます街よ

其処も東方にあるのだ

だから 僕も秘かに運んで行け

ああ 雲よ

特急の如お前は行ってしまった

雲よ 僕のなつかしい人の街を通る時は

元気づけの雨を降らせておくれ

雲よ 愛する雲よ

何とお前は晴やかだらう

この詩を読んでいると、明美という女性と故郷の雲が重なり、いつしか故郷の上空の上に浮かぶ雲への憧れが、大らかになりズムとなって詩行が生み出されている。酒木さんは愛する存在や自然と語らう詩人として出発をした。雲を見ているとその刻々に移り変わる姿に、好きな女性の姿を見ってしまうという、青年期の多感な感受性が的確に記されている。雲が過ぎ去るように好きな女性も「特急の如お前は行ってしまった」のだが、再び故郷の街を通る時には「元気づけの雨を降らせておくれ」と願う。そして「雲よ 愛する雲よ／何とお前は晴やかだらう」と別れていった雲であり恋人を賛美し続けている。この最終連などは、酒木さんの他者の幸福を願う心の優しさが滲み出ているところだ。このような心持ちで酒木さんは学生時代や二十代を過ごしたのだろう。酒木さんが第一詩集を出した後には、仕事が多忙になったこともあり、なぜか四十年以上も詩集を出さなかった。私の勝手な推測だが、酒木さんは「あけみ」という詩神を失い、しばらくは詩

作のテーマを見失っていたのかも知れない。しかし内面の奥底から湧き立ってくる自己の真のテーマを発見し熟成することを願ったのだろう。その長い期間を酒木さんは一人で模索し続けて、故郷徳之島の空に浮かぶ雲と筑波山の上に流れている雲が、同じ地球にある二つの故郷を結びつけているものであることを発見していったのだろう。つまり酒木さんは地上の人であると同時に天上の雲からの視線も自覚的に抱え込んでいった。今回の詩集『筑波山』は、その四十年の時間の中で酒木さんが大切にしてきた二つの故郷を地上と天上の二つの視線から結晶化したものと言えるだろう。

2

新詩集『筑波山』は二十六篇が収録されている。一章「筑波山」九篇、二章「徳之島」八篇、三章「平家の里 雪」九篇の三章に分かれている。これらの全篇に貫かれていることは、美しい光景を率直に読み手に伝えようと試みていることだ。人は心によみがえって美しい光景をどのくらい沢山持っているか、日常の暮らしの中で疲労し精神も磨り減り、心もよどんでしまうような時に、人はどのように心を回復させていくのか。酒木裕次郎さんの新詩集『筑波山』を読んでいると、精神や心を癒し、再び新鮮さを取り戻していく方法を示してくれている。酒木さんは、四季を通して朝晩、筑波山を見上げて、その美しさを讃えている。富士山を見上げてその美し

さを讃えた「富士見」という地名は多い。酒木さん詩篇には「筑波見」という地名が出来そうなくらいの憧れが濃厚に感じられてくる。詩集『筑波山』はその意味で、酒木さんが筑波山を通して、現代人が忘れてしまった故郷の山河への畏敬の念や、山への憧れ親しみなどへの思いがさりげなく描かれている。一章「筑波山」九篇は全て筑波山について語られたものだ。その中から詩「冬の筑波山」を引用してみる。

### 冬の筑波山

北風の強い日は大宇宙の塵を吹き払い  
筑波山は生き物の姿をして

街の住まい近くまで迫ってくる

まるで生きている男女のようだ

平野のど真ん中に居座って

筑波山は地域を二分した

いささかの気兼ねもなく

陣取っている姿は

高名な政治家のようだ

昔から結城筑波と謳われてきた

明野 岩瀬 真壁 八郷

古河 結城

肺いっぱい吸った空気が

おいしくて

澄み渡った日に

こちよく肌にも馴染んでくる

筑波山は八七七mの女体山と八七一mの男体山が睦まじく寄り添う男女のように見える山だという。また民衆の幸せを願うような高名な政治家のような風格も感じられるという。そのように酒木さんは筑波山を親しい存在として日々感じている。見慣れた存在を日々新たに感じなおして発見していくことが酒木さんの方法であるのだろう。「筑波山を真ん中にして／我々は日を送っている／遠い祖先も／筑波山の地下から湧き出る神水で／田圃を耕し米を作った／天が一のおいしい米は／いつの時代でも／筑波農家の誉れの宝だ／坂東太郎（利根川）の川面からも／筑波山を／垣間見ることができ／風の吹く日は小貝川からも鬼怒川からも／筑波山の姿をくつきりと見ることができ」この連からも分かるとおり、酒木さんは筑波さんをおまえと呼ぶほど親密な関係を築いている。筑波山の地下から湧き出る「神水」の恵みで良質なお米が取れる恩恵に感謝を捧げている。また利根川などの大河に映る筑波山の雄姿に美しさを感じている。朝晩の通勤時や営業活動をしている間に、筑波山をいつも見上げて、筑波山と語り合い、筑波山から生きていく勇氣や元氣を与えられているこ

筑西下館からの眺望も格別だ  
筑波山を真ん中にして  
我々は日を送っている  
遠い祖先も

筑波山の地下から湧き出る神水で

田圃を耕し米を作った

天が一のおいしい米は

いつの時代でも

筑波農家の誉れの宝だ

坂東太郎（利根川）の川面からも

筑波山を

垣間見ることができ

風の吹く日は小貝川からも鬼怒川からも

筑波山の姿をくつきりと見ることができ

佐竹氏直系の真壁城址から

まぢかに見上げた筑波山は

旅籠でもしつらえて幾夜でも幾夜でも

そこに立っていたい気持ちにさせられる

快活な娘のようできて

近寄りがたい崇高さも

あわせもっている

冬を告げる筑波風は

とを素直に記している。筑波山を中心とした生態系の恵みや人々の畏敬の念を酒木さんは誰よりも代弁しているように思われるのだ。人間は自然の生態系を忘れて、風や雲や雨により「神水」の恵みを感じできなくなっている危機感も読むものに気付かせている。最終連の「冬を告げる筑波風は／肺いっぱい吸った空気が／おいしくて／澄み渡った日に／こちよく肌にも馴染んでくる」などは、酒木さんが筑波山の自然の力を身体に感じて生きていることをよく示している。その意味では、その地域の山河と共に生きることの良きモデルとして詩集『筑波山』は読まれる可能性があると考えられる。

### 3

二章「徳之島」七篇には、生まれ故郷の徳之島で暮らした思い出を語っているが、変わっていく島の姿を記している。そこには「肝心なところが消えてしまった」のだ。

### 徳之島(1)

### (略)

遠い昔から砂浜の一隅に

不思議な泉水が湧き出していた

その泉水を我々は浜泉と呼んでいた

満潮時に海面に隠れてしまう浜泉は

いまも絶えることなく  
清水を湧き立たせている  
海からあがった私たちは  
満潮で浜泉が潮水になる前に  
大人も子供も先を急いで身体を洗い服を着て  
夕暮れの海を後にした  
面倒見のいい文一兄さんは  
ペソをかいているよその幼い子供の身体を  
浜泉の水で洗ってやり 服を着せてあげる  
少し年上の私は自分で服を着ながら  
じいっとそれを見つめている  
満潮で押し寄せる早波で浜泉はもう塩辛い  
喉の渴いた私は  
その塩辛い水を 小さい手で掬い上げて飲んだ  
浜泉は昔のままだ  
だがどうしたことだ  
本当にままごとのようなスペースしかない  
しかし島に住む我々には  
充分に用が足りていた

強い陽射しを避けて  
男女手を取り  
腰掛けて遊んだアダンの林は

紅い蘇鉄そごの実が熟れる  
ハイビスカスの深紅あかもえる  
白百合咲き匂う  
前が東シナ海 後ろが太平洋  
ふたつの大海に浮かぶ海の島  
永遠に輝いてほしい！  
永遠に！

酒木さんにとつて徳之島の浜辺に湧き出ていた浜泉こそが故郷そのものだったのだろう。その浜泉こそが島の人々が海から上がる時の清めの水であり、身体の渴きを潤す必需品だった。また浜泉のある海辺やアダン林の中に生息していた動物たちもまた故郷の重要な一員だったのだろう。しかし「ふるさとの自然は／肝心なところが消えてしまった」のだ。そんな過去の故郷を偲ぶ苦い思いも抱えながらも、酒木さんは残された自然を「永遠に輝いてほしい！」と願いつける。どんなに変わろうと故郷を自分は慕いつけるものであることを宣言して詩を終えている。酒木さんがなぜ四十年ぶりに詩集を刊行しようと考えたか。私はその深い思いが知りたいと詩を読んできたが、少しずつ「肝心なところが分かってきた。酒木さんは筑波山の地下から「神水」が湧き出たり、徳之島の浜辺から「浜泉」が溢れてくることを当たり前に思っていない」と警告している。人間が自然の恵みを忘れてその命

跡形もなく消えている  
テトラポットの防波堤になり  
横をいまふうの湾岸道路が走っている  
早熟だった私たちの遊び場はもうない  
なんということだろう  
なんという永い間  
私はふるさとに帰ってこなかったのか  
ふるさとを忘れていたのか  
そんなにも多忙に 生きていたのか  
三十年という年月はながい  
ふるさとの自然は  
肝心なところが消えてしまった  
鉛色のセメントのかたまりが目立つばかりだ  
アダンの実は真赤に熟れていた……  
アダンの林に生息していた生物たちは  
何処に行ってしまったのだろう

誰もふるさとは選べない  
しかし ふるさとは我が子の帰宅を待つ母のように  
薄情な私をなにもいわないで迎えてくれた  
我がふるさとは徳之島  
ただひとつ

の源の水を巡る生態系を壊さないように、身近な自然に感謝しながら必要だけその恵みを受け取るようにすべきであると告げている。そんな生き方をするための感受性のあり方をこの詩集で提示しているのだと私は感じられた。故郷とどう向き合い、どのように生きて、故郷を再生していくかを考えている多くの人々に、残された湧き水を手で掬って飲むように、読んでほしいと願っている。

最後の三章は多様なテーマの詩篇だ。その中で詩「自分が生まれた国は」の中の「日本ではなく地球のために尽くせるか」という一行は、鋭く私達に何かを問いかけている。